資料3

完全性及び推薦地域に関するIUCN専門家の指摘事項

○奄美・琉球の世界自然遺産としての価値を検証するとともに登録に向けた課題を把握するため、平成19年度及び平成24年度に環境省が、世界自然遺産の評価に直接関わった経験のあるIUCN専門家(レスリー・F・モロイ氏)を奄美・琉球に招聘し、奄美大島(H19・H24)、徳之島(H19)、沖縄島北部(やんばる地域)(H19・H24)、久米島(H19)、宮古島(H19)、石垣島(H19)、西表島(H19)、石西礁湖(H19)に同行し、推薦に向けて価値を整理する上での考え方や留意点について、同氏から総合的な助言を得た。

○モロイ氏は、世界自然遺産の審査を担当する国際自然保護連合(IUCN)の自然遺産評価委員として特にアジア太平洋地域の遺産物件の審査を担当。1995年には屋久島及び白神山地の評価団として来日。

○モロイ氏の助言の概要は以下のとおり。

1. 奄美・琉球が満たす評価基準(クライテリア)について

クライテリア(ix)(生態系): 大陸と連結と解離を繰り返した複雑な歴史を持つ「大陸島」が鎖状に連なり、数多くの固有種・遺存固有種が生息・生育している。

クライテリア(x)(生物多様性): 科学的にも保全の上でも興味深い多様な陸上生物の重要な生息・生育地であり、その多様な生物のほとんどは絶滅の脅威にさらされている。

2. 推薦する地域の規模・完全性の考え方について

- 遺産地域はそのエリアの生物多様性の要素のうち主要なタイプを含み、長期的に維持・管理するのに十分な大きさ・強健さのある場所を選ぶ必要がある。
- 奄美・琉球は人為的影響があるため、重要な種の好適生息地について可能な限りの広さを遺産地域とする必要がある。
- 但し、断片化した生息地の管理には限界があるので、クライテリアが説明可能だからと言ってその全ての島を遺産地域に入れる必要はない。十分に保護できない所(十分な広さがない所)を入れても世界遺産委員会を満足させることは出来ない。
- 奄美・琉球の地史と種分化の関係など生物地理学的興味を十分に代表する地域を選ぶこと。

3. 候補地域について

- 推薦する一連の地域(シリアルサイト)の重要な構成地域として、十分な価値と十分な面積のある奄美大島、沖縄島のやんばる地域、西表島の3地域(合計40,000ha)が際立っている。
- 更に、価値証明にとって重要な種が生息し、小規模な面積であるが遺産地域としての可能性のある地域として、徳之島があげられる。

表1. IUCN専門家が候補地域として推薦した地域

地域	価値	遺産となり得る面積[*1]
奄美大島	アマミノクロウサギ、ルリカケスなどの遺存固有種の生息地。海域までの亜熱帯雨林の広がり。	15,000ha
やんばる地域(沖縄島)	ノグチゲラ、ヤンバルクイナ、多くの両生類・爬虫類等、固有種の生息地。日本本土の1/1000の面積の森に1250種の植物が生育。	10,000ha
西表島	ネコ科の中で最も希少なイリオモテヤマネコの生息地。山頂から海岸までの保護された亜熱帯雨林景観が唯一みられる。	15,000ha

[1] 現地視察時に提示した地形図、植生図、保護地域図及び面積表等の情報等を基に、IUCN専門家としての知見を総合して大まかに見積ったもの。

資料３

徳之島	井之川岳の森林には、多くの遺存固有種や世界的な絶滅危惧種が生息。	2,000ha